

2021年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	林 竹人
研究テーマ	「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」の視覚的唱導資料としての価値を高める研究
研究概要	江戸中期、近江国日野出身の絵師高田敬輔（1674～1755）が、浄土宗の根本聖典『選択本願念仏集』を「選択集十六章之図」に、浄土三部経の『無量寿経』の教理を「無量寿経曼荼羅」に絵画表現した二つの曼荼羅について、それぞれの絵相が、原文に引用される経・論・疏の何を根拠に描かれたか解明することによって、より一層、視覚的唱導資料としての価値を高める。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>① 絵師「高田敬輔」の生涯や画歴について、『敬輔画譜』の「高田敬輔翁略伝」の読み下しから、二つの曼荼羅の制作経緯や時期を把握できた。また、近世画論の『画譚雞肋』、『續近世畸人傳』、『画道金剛杵』、『竹洞画論』等から、地方での活躍よりも中央画壇での活躍を期待されていた旨を知り得た。</p> <p>② 「選択集十六章之図」では、十六の各章の絵相それぞれについて、その絵相が原典である『選択本願念仏集』のどの文言に着目しているか抽出して読み下し、その典拠となる経、論、疏を明示して解説を加えた。そのことにより、例えば、第一章の絵相は、聖道・浄土二門論を提示し、浄土門に帰入すべきことを象徴する表現である事を論述した。以下、残りの十五の章についても同様に考察した。</p> <p>③ 「無量寿経曼荼羅」については、「序分説法相、正宗説法相、流通説法相」「所行」「所成」「所撰」と大きく四分割し、注釈書である随天の『大経曼荼羅開壇記』の翻刻をもとに、68の各絵相が原典である『無量寿経』のどの教義を表現しているか、経文を明示し、注釈を加えた。そのことにより、一般の檀信徒や初学の僧侶が目で見ても解る視覚的唱導史料として、その価値を高めることができた。</p>
2. 今後の課題	<p>「無量寿経曼荼羅」の注釈書である随天の『大経曼荼羅開壇記』（全巻、212丁）の翻刻をしたが、一部に不十分な読み下しがあるので、再度、精査し、絵相と注釈の関連性を高めて、さらに充実させたい。</p>